「甘え」に関する言語・倫理学的研究

（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D160404
氏　　名：黄萍

本論文は，日本人の心性とみられる「甘え」に焦点を当て，言語分析ならびに倫理学的考察を通して，その心理や人間関係の構造を解明し，さらに「甘え」の今日的意義を浮き彫りにしたものである。

本論文は，序章と本論三部（第一部：「甘え」の言語的考察，第二部：「甘え」の倫理的概念に関する考察，第三部：「甘え」の倫理学的意義）と結章からなる。

序章では，本論を通じて考察の軸とした精神科医・土居健郎の「甘え」論を分析することで，考察の指標となる四つの観点，健康的な「甘え」と病的な「甘え」の区別，「甘え」の音韻における神話的起源，「甘え」がもつ「生の意欲」「非合理な身体性」「純粋な子ども性」を浮き彫りにした。

第一部においては，第一章で「甘え」の起源が母子間の感情から対人関係一般に拡張されることや，「甘え」が自他一致を目指す情緒的・非論理的心理にねざすことを明らかにし，第二章では，「甘え」の語に先行する同根の形容詞「甘い」の語源的解釈と音韻・音声学的考察を通して，「甘え」の心理上の原型が，「乳児の乳や母への憧憬」「現実界の美味への人間の感動」「天上界への人間の感嘆賛美」にあることを示し，第三章では，「甘え」と関係のある一連の語彙のクラスター分析を行い，それを受け，第四章では「甘え」概念の新たなコード化（「甘え」がもつ「双方向」「一体感」「依存」「期待」「自制」という五指標の提起）を行った。

第二部では，第一章で，「甘え」と，自己愛や欲求としての愛との関係について明らかにし，第二章では普遍的なイデアへと向かうプラトン的エロースと，キリスト教的な与える無償の愛アガペーについて考察し，「甘え」における愛が，それらのどちらかに依拠したものでなく，双方性を有するものであることを，第三章ではアリストテレスの説くフィリア（友愛）が有する「好意性」「均等性」「交互性」「協和性」「卓越性」が「甘え」の性向と重なることを，第四章では他者と関わることへの欲求が満たされないことによって生じる孤独感が，「一体感」への欲求を伴う「甘え」と類似する感情であることを，それぞれ指摘した。

第三部では，日本的人間関係を倫理学的に解説する和辻哲郎の理論を取り上げ，日本的関係論にみる倫理的意義を「人間（じんかん）」論（第一章），「間柄」論（第二章），「生の哲学」（第三章）の視点から考究した。その考察を通して，個－社会，心－肉体，人－自然，自己－他者，特殊－普遍を分断的にみる多くの西洋思想に対して，日本的な主客関係では，それらの分断が主体における普遍内在的な統一連関の内に解消・総合されることを指摘した。加えて，この見方に基づけば，「甘える」－「甘えさせる」関係の内にも，個別の特殊意識が「間柄」的関係を介して具体的普遍を実現するという倫理的理法が確認され，この自立した相依関係としての「行為的連関」こそが日本的関係論の特徴であることを指摘した。

結章においては，知性の肥大化によって，根源的な生の実存的欲求が満たされず，心身に不安定さがもたらされる今日的傾向に対して，それを解決する方途として，直接的な乳児の母への存在信頼に加え，「生の哲学」に合致し，身体や意欲を介した大いなる実在への帰還･一体化の機能を有する日本的「甘え」の有効性が示された。